

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520569

研究課題名(和文)日本語文法事象の全国分布と国語史との関係

研究課題名(英文)Relationship between Grammatical Phenomena Seen in Japanese Dialects and the History of Standard Japanese

研究代表者

彦坂 佳宣 (HIKOSAKA, YOSHINOBU)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：00111237

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、方言を含む今日の日本語がどのような歴史的経緯を経て成立したかを研究したものである。今日の模様は主に『方言文法全国地図』(国立国語研究所編)により、これを各地の過去の方言文献と比較対照し、その史的变化を推測した。取り上げた事項は、意志・推量表現、格助詞(準体助詞)ノ・ガ、接続助詞(条件表現)、敬語について二人称代名詞と尊敬語述部形式などである。方言文献は近世の戯作類・説経資料、漂流民の残した資料などで、山形庄内・新潟・江戸・上方・佐賀、熊本、鹿児島のものにつき考察し、地図と比較した。そして各事項ごとの分布模様をまとめる、方言伝播の種類、また中央語史の時期との対応を考えた。

研究成果の概要(英文)：This paper discusses the historical changes of Japanese language, comparing 『方言文法全国地図』(国立国語研究所), a Japanese dialect map published by the National Institute for Japanese Language and Linguistics, and other past works on Japanese dialects. Grammatical items examined are; expressions for intentions and assumptions, case-marking particles “no” and “ga,” conditionals and honorifics. Studies conducted in Edo period on dialects in Yamagata, Niigata, Edo, Kamigata, Saga, Kumamoto and Kagoshima is used for this purpose. This paper focuses its analysis on the patterns of the language spread from the capital to the rural areas as well as the characteristics of dialects in each region.

研究分野：日本語学・方言研究

 キーワード：言語地理学的研究 文献方言学 国語史研究 意志・推量表現 条件表現 主格表示表現 敬語表現  
伝播類型

### 1. 研究開始当初の背景

国立国語研究所から全国方言の文法調査結果をまとめた『方言文法全国地図』全6巻が完成された(2006年3月完結)。それにより全国的な文法事項の分布模様が明らかとなり、言語地理学的研究により全国視野での歴史的な考察の道が開かれた。私自身も過去に科研費を取得し、『方言文法全国地図』の順次刊行に合わせてある程度の研究を進めていた。

これ以前の私の主たる研究は近世尾張地方の文献収集と文献学的研究であり、近世語の中の尾張方言を、芥子川律治氏の先行研究を参考にして考察していた。それがある程度のまとまりが出来てから(彦坂 1997『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』)、今日の東海地方の方言模様はどうかという、近世期の模様がどう今日に展開してきたかに興味があった。

ちょうどその時期に、『方言文法全国地図』の地方調査員となり、岩手県の一部の調査を担当して、次第に全国規模での方言史研究への興味を強めていた。この間、国立国語研究所での調査結果の整理のもとに『方言文法全国地図』の公刊が順次開始され、調査開始から約30年後に全6巻が完成した。私も公刊開始の時期から、少しずつ上述の興味のもとに幾つか文法事項の言語地理学的研究を進めていたが、今回の科研費では、今までの研究のもとに文法事項の変化と伝播の模様、またそれに類型があるかどうか、加えて各地方言に強く影響する国語史のそれとの対応はどうかの点を主として研究する段階となったものである。

### 2. 研究の目的

『方言文法全国地図』の完成により言語地理学的研究による史的研究の準備が出来たとは言え、従来これを活用した研究は視点・手法において地図そのものの解釈が主であり、各地方言を領導する位置にある国語史を参照することは十分でなく、ましてや地方語の歴史を顧慮することは稀で、論証に確実性の欠ける面が強かったと感じる。これは文献による国語史研究と今日の方言を研究する方言研究とが、研究者・研究視点ともかけ離れていた結果であると思う。本研究は、これらを一体のものとし、困難ではあるが各地方言史を推測し、それらを束ねた日本語方言史を構想した。

そして研究対象を、まず全国的に広く展開している文法事項とし、意志・推量表現、条件表現、格助詞ノ・ガ、また敬語表現にわたる事象をとりあげ、国語史との関連を考察する研究を伝播類型の解明と合わせて企てた(他にもアスペクトその他を含めて計画したが十分には届かなかった)。国語史と各地方言の模様との関連はどうか、また事象ごとの伝播模様そしてその上位に共通する伝播類型があるのかどうかという課題である。

### 3. 研究の方法

本研究では、このように『方言文法全国地図』の地図の解釈にあたり、国語史を参照するのに加え、さらに各地の過去の方言文献を交えて、論証を確実なものにすることを意図した。各地方言についての文献は少ないものの、直接的な過去の模様(残念ながら歴史とまでは行かない)がいくらか分かることが考察に利点となる。『方言文法全国地図』の今日の模様に加えてやや遡った時期の模様が明らかになれば、史的变化の推測に確実さと厚味が増すはずである。

そしてここで言う中央語研究としての国語史ではなく、各地方言史を想定した全体としての日本語史の視点から、その総体としての把握が必要である。言い換えれば、分布図による言語地理学的研究に、国語史研究の知見と文献方言学的方法とをぶつけて、各地方言の歴史も顧慮した日本語文法史の研究を行う試みである。これを実施するには困難がともない、理念に近い考え方であるが、ともかくこの視点による考察を試みたのである。

### 4. 研究成果

この研究の成果はおおよそ3点にまとめられる。

第1は、考察の基礎となる過去の各地方言資料の研究である。これらは主として近世(江戸時代)後半期のものであり、戯作資料として北の地域から順に、庄内(山形県)、新潟、江戸、上方(京阪両方)などがある。他に、今まであまり知られていない石見・熊本地方の説教集(熊本県立大の米谷隆史氏紹介)、また薩摩漂流民ゴンザの資料(村山七郎氏、江口泰生氏による研究成果)を利用した。これらの資料のうち、今までは中央語の資料である上方・江戸のものによる国語史研究が主であり、各地方言の研究としてこれらを活用することはあまり無かった。本研究は、これらの文献学的研究とその活用により、近世後半期の各地の模様が、点綴ではあるが面的にかなり明らかになったと考えている。これらは必ずしも方言主要地にあたるものとは言い難いが、それらを繋ぎ、かつ空白地帯を無理のない状態を想定して面的視界を得れば、今日とやや過去との2層の手がかりが得られることになる。

第2は、これら国語史と地方文献をにらみあわせながら、『方言文法全国地図』の言語地理学的解釈を進めたことがあげられる。この手法は地図の分布解釈から歴史を推定するものであるが、上述のように地図だけに頼った推測は確実さを欠くことも多い。見かけ上の事象が他の事象との相関の上で特定の様相を見せたり、史的背景を抜きにした推測の結果はあやまった結果を招くこともある。

本研究は、上述のように各地方言文献と国語史研究の知見を援用しつつ、『方言文法全

国地図』の分析を進めた点に、幾らか視点の  
新しみや論証の確かさが加わったものと思  
う

第3には、以上を総合することで、中央で  
生まれた新しい文法事項(形式)がどのよう  
に周囲に伝播するか、あるいは地域によっ  
てはその伝播を受け入れず特有の方言的方  
向に向かうかの点が幾らか明らかになっ  
たことである。

以前から国語史研究あるいは広域地図に  
よる言語地理学的研究によって、日本の東  
西に大きな言語差があり、また日本の周辺  
部は古態的な様相を呈することが知られて  
いるが、今回の研究では、上述した各文法  
事項ごとの伝播特徴を捉え、それらを総  
合して分布・伝播模様を類型としてまと  
める段階になった。今まで指摘のある東  
西対立的様相は重要な類型であるが、地  
方文献や国語史を参照することで、これ  
らを微修正すると、伝播型として次のよ  
うな点が指摘できる。

(1)東西差を前提として、この中では西  
高東低の傾向(西部日本は国語史上の比  
較的新しい事象が展開し、東部は古態の  
性格が強い)があること、あるいは、(2)  
周圏論的つまり同心円状に伝播する事項  
としない事項のあること、(3)同心円状  
でも中央の事項・形式が遠く周辺まで伝  
播するものとし、あるいは、(4)他の事  
項との干渉により分布が上記(1)のよ  
うな類型に外れるものがあることなど、  
各種の差異も現れ、またその要因の幾  
らかが明らかになった。

例えば(1)の東西差と西高東低傾向は  
今回考察した殆どの事象に共通すること  
であるが、その上で(2)は、意志・推量  
表現を見ると、東国には国語史の上代か  
ら使用されたベシが隆盛し、中世に多い  
ウズ類も東山地方にあるのに対して、西  
日本ではベシは既に消滅し、ウズ類も極  
めて稀であり、中世後半から近世語の範  
疇に入るウ・ヨウ、推量ではジャロー  
(東はダロー)などが広く展開している。  
これは中央(近畿)から先行伝播した古  
態のベシ・ウズ類が西日本では早くに衰  
退し、次の時代のウ・ヨウなどの時期の  
形式に塗り替えられたのに対し、東日本  
では国語史の上代以来の古態形式類がな  
お残っているために、不均衡な方言周圏  
の分布になったものである。なお国語史  
でのこれら助動詞の用法と、その後の各  
地方言の同じ類のものとは、幾分か意味  
・用法も殊にしているが詳しいことは略  
す。

同じく(2)で、条件法において理由を表  
す用法も、東西対立ながら東西端の形式  
が大きく異なり周圏的分布とは言えない  
こと、対して逆接条件表現は極めて周圏  
的な型を取ることで、別事項であるが準  
体助詞も東西に偏りのある分布傾向が  
強いことなどがある。これらの点は、そ  
れぞれの個別理由が介在している。

理由表現が東西地域の上で均等でない分

布なのは、東日本でのカラの隆盛による  
ものである。その由来であった中世期の近  
畿では類似形式として先行するヨリがあ  
り、カラと競合してカラは成長が抑えら  
れた。また同地域ではホドニ・ニヨッテ  
など他の形式も発現している。対して東  
日本では、新興地域の都市としての江戸  
が大きくなる時期に、古典的なヨリ、ま  
た品位が上であるホドニ・ニヨッテ・サ  
カイなどでなく、早くから格助詞として  
あったカラがさまたげられることなく口  
語的な理由表現として容易に受け入れら  
れた。このために、方言レベルでは東部  
にカラが隆盛し、不均衡な分布となっ  
たと解釈した。

一方、逆接条件表現は東西末端で類似  
形式があり、方言周圏論的分布の典型で  
ある。これは、ドモ・トモ、ケレドモな  
ど比較的形式数も少なく、理由のような  
新興形式の発生が少なく、またにことさ  
らに強制的に理由を述べる必要も弱く、  
ために均等に東西へと展開し、同心円  
的な分布となっただけであろう。

(3)は、形式が多数あることを特徴と  
する敬語形式で見られる。シャル・(ラ)  
レルなど古くからある形式は周圏的分布  
を呈するが、最新のオーニナルは関東・  
関西の都市部に集中する傾向が強く、  
類型的な東西差よりも都市化との関わり  
が強い。国語史のごく浅い時期に生じた  
形式であることが要因であろう。

オーニナルの場合、分布は近畿と関東に  
またがる都市部によく現れている。発生  
の時代が新しく、近世後半期以後の形  
式であり、そうならば、伝播はそう遠く  
までは届かない。そしてそれは都市に人  
口が集中するような状況で、かつマス  
コミュニケーションが発達して、都市部  
の魅力ある形式がいち早く飛び火の形  
で都市地域に伝播したからであろう。か  
つての方言は「地を這うように」伝播す  
るとされるのに対して、近代的な伝播様  
式による例と考える。

(4)は、主格表現の近代語的形式ガが、  
恐らく中央地域の近畿が先行して放射さ  
れたと推測されるものの、北陸地方には  
明確なガ表示が見られにくい点が注意さ  
れる(多くの事象は近畿から東へは東海  
道よりも日本海側を北陸へと進出する傾  
向が強い)。それはこの地域に古態のガ  
準体助詞が勢力をばり、同音衝突をさ  
ける形でガ主格表現がとれなかったた  
めと思われる。そして近畿からさらに  
離れた新潟地方にはガ主格表示が盛ん  
であるが、この分布からは近畿由来の  
ものが北陸を経て伝播したのではなく、  
関東中央部から峠を越えて伝播した可  
能性が高い。

また近畿地方中央部では、『方言文法  
全国地図』によれば主格ガが零の地域が  
かなりある。するとこの地域では主格ガ  
の成立が遅いか無かったかと考えられ  
がちであるが、近世期の洒落本類によ  
ればガ主格は既に確立しており、齟齬  
がある。この点は、関西では従来の「  
花 咲く。」といった主格無表示も継承  
される一方、「花が咲く」など論理的あ  
るいは強意的用法も定着し、多様な様  
相がある

ためと推測する。そして、話し言葉的レベルではなお場面に依存した「花 咲く。」など主格零表示の言い方も表現法の1つとして維持されているためであると考え。この方向は、まだ留意した調査はしていないが、各地の表現が層的に多様であるか否かの問題へとつながることになる。

このように個々の事象の伝播特徴とその要因を考えつつ、多くの事象に共通する東西差、方言圏論的分布模様、また伝播ルートなどを考えた。そのルートは、近畿から西への伝播では九州東部まではよく届き、それ以西はかなり古態的な模様をとどめること、東部へは近世期の日本海海運のルートで北陸を経て東北にまで届く場合もあり、一方、江戸を除いて、太平洋側から東北へと伸びることは近世期まではかなり緩慢であったことなどの伝播類型が明らかになった。今日、太平洋ベルト地帯は早くから開けた地域と思われがちであるが、近世以前の東日本へは、北陸から日本海回りでの伝播類型が強く、また近世に都市として生まれた江戸には上方語が飛び火的に影響し、近世後半期から江戸語が隆盛になって周囲に影響を及ぼすのであるが、その影響は関東中央といくらか新潟地域へ強く、東北地方の内陸、太平洋側は低調であったことが考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

- ①彦坂佳宣, 関西と関東 - 二大方言の「あいだ」, 日本語学, 33-1, 2014, 18-29, 査読無
- ②彦坂佳宣, 尊敬語補助動詞類の分布とその史的経緯 - 『方言文法全国地図』「書きますか」を主として - , 論究日本文学, 2014, 175-193, 査読無
- ③彦坂佳宣, 越境者たちの方言誌 - その日本語史への寄与 - , 論究日本文学 98, 2013, 21-39, 査読無  
彦坂佳宣, 近世中頃の中国地方山間部における尊敬語辞類 - 「石見方言茶話」の模様と日本語史における位置 - , 立命館文学, 630, 2013, 893-902, 査読無
- ⑤彦坂佳宣, 「あなたの傘」昭和二七年全国敬語調査(国立国語研究所)の解釈, 国語語彙史の研究, 32, 2013, 199-219
- ⑥彦坂佳宣, 近世中頃の中国地方山間部における格助詞ノとガの用法 - 「石見方言茶話」「田植草紙」の考察から - , 論究日本文学, 96, 2013, 1-18, 査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

- ①彦坂佳宣, 東海地方の敬語の歴史と地理, 国立国語研究所岡崎敬語調査の共同研究発表会, 2014年12月20日, 岡崎市市民活動センター(愛知県岡崎市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

彦坂 佳宣 (HIKOSAKA, Yoshinobu )

立命館大学・文学部・教授

研究者番号: 00111237